

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500613		
法人名	有限会社 もみじ		
事業所名	グループホームもみじの里		
所在地	福岡県宮若市上大隈675-1		
自己評価作成日	令和5年9月3日	評価結果確定日	令和5年9月29日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和5年9月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

令和5年 5月8日より コロナ感染症は 5類に移行しました。 3年半に渡る 自粛生活の リバウンド現象は 拡張し 減少傾向にあった コロナ感染症は 当然の如く再び拡大傾向にあります。穏やかさを取り戻しつつあった 介護施設には コロナ感染症 発生当初の 緊張感も 今現在何ら、変わりはありません。入居者様の 楽しみの一つだった ボランティアさんのお楽しみ会も、いつ 再開されるか不明な中 スタッフ一同 何とか 楽しい日々を 送って頂きたく ビデオ や CDを 活用しています。コロナ前は外出の多かったホームでしたので、早く 自粛規制が とけるように また どんな時も笑顔の方法はあると思い入居者様を支えて行けるように 努力して参りたいと思います。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

昨今の感染状況から地域との交流がままならず、入居者の高齢化や重度化に伴い介護の手間が増大する中、日々の気づきを共有しながら、理念に掲げた全入居者の安全や健康、楽しみや笑顔のある生活を全職員が一丸となって支援している。昨年寝たきり状態で医療機関から入居された方は、毎日2回の訪問看護と連携し、褥瘡治癒や拘縮の防止、尿路感染防止に努め、チップで少量ずつ嚥下を確認しながら食事を介助している。協力医療機関と24時間いつでも連絡できる体制を構築し、暮らしを支援した方を看取るのは自然な事と、今後も看取りに関わる予定である。管理者は日々介護に関わりながら職員の日頃の介護を労い、誕生日にはケーキを贈り、夫々の暮らしを気遣うなど、共に生き生き勤務できる職場づくりに務めている。今後も毎月の家族面談や運営推進会議で家族や地域の理解や協力を得ながら、更なる理念の具現化が期待できるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	☐	1. ほぼ全ての利用者の	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	☐	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	☐	1. 毎日ある	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	☐	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない			☐	4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	☐	1. ほぼ全ての利用者が	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	☐	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが			☐	3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	☐	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	☐	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	☐	1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	☐	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
		☐	4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	☐	1. ほぼ全ての利用者が	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	☐	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	☐	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名

グループホーム もみじの里

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	現状においては地域との交流は新型コロナウィルス感染防止のため活動は休止状態である。	昨今の感染状況から地域との交流がままならず、入居者の高齢化や重度化に伴い介護の手間が増大する中、日々の気づきを共有しながら、理念に掲げた全入居者の安全や健康、楽しみや笑顔のある生活を、全職員が一丸となって支援している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在は、自治会のレクリエーション等も 休止しているため、(コロナの為)交流ができていないが清掃活動など参加して地域との関わりを大切にしている。	グループホームもみじの里は一つの区として自治会に加入し、ホーム周辺の清掃活動に参加したり、回覧板で自治会主催の敬老会やクリスマス会中止などの地域情報を得ている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会の交流会を通して理解や支援の輪をひろげていたが、コロナ蔓延防止や緊急事態宣言発令にて 運営推進会議等でも地域や行政等との交流が停滞している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ感染対策の為 ホーム内 会議に切り替えているが 報告書は市や自治会に 提出している。	昨今の感染者増加に伴い、前回の運営推進会議開催は見送り、家族代表や第3者委員でもある自治会長や公民館長などに、運営や入居者の状況を書面で報告し、意見を伺っている。特段の意見はなく、会議録は玄関で公表している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村の施設への立ち入りが困難である為推進会議への出席は控えて頂いているが、議事録等の配布をしている。	市担当課にメールで毎月の居室状況や情報を交換している。今年度地域同業者協議会GHみやわかの研修担当である管理者は、市と連携した研修を実施予定である。地域包括支援センターには、GHみやわかを通じて運営推進会議開催に関する情報提供をお願いする予定である。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルを作成し、研修等はほぼ毎月行っている。拘束や 拘束着等の使用はしないが、ベット柵を使用し、転倒事故防止に努めているが 柵の幅を広くするなどの拘束に当たらない対応を取っている	身体拘束の具体的な内容や止むを得ない場合の条件について理解している。車イスでの座位保持が不安定な入居者の転倒を防止する支えの使用を家族に説明し同意書を取り交わし、毎月の検討会で見直しを行っている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ホーム内勉強会にて、虐待のないケアに努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度に入り 研修会参加も活発になりつつある。GHみやわかも再開し、今年度の 研修に盛り込まれている。	日常生活自立支援事業や成年後見制度の内容やその違いを理解を深めたいと、整備しているパンフレットを資料に内部研修を実施している。制度活用を協議した入居もあったが、活用には至らず現在まで活用はない。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の段階で、入居者様とご家族のニーズを把握した 契約事項について納得できる様話し合いには 多くの時間をかけて 後のトラブルなどにならないように十分に説明しまた 質問等には丁寧に対応している		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族に契約等について、不安や疑問がないように十分な説明を行っている。不明な点においては、再度、説明をし、理解していただけるよう努力している。	毎月個々の家族との面談で運営や入居者の暮らしぶりなどを詳細に報告したり、随時メールで状況を報告し、意見の表出を促している。「入居者に会いたい」は、コロナ禍真っ只中でも感染対策を講じて叶え、差し入れに対応している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議等で、意見や提案をしてもらえ機会を多く設け、全体で話し合えるようにしている。	毎月のミーティングは9時半からと、夜勤者も参加できる時間帯に開催している。入居者の情報を共有し、トイレの手すりが握りやすいようにクッション材を巻くなどの提案はその都度実践している。管理者は日々介護に関わりながら、職員の意見や思いを受け留めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の生活環境を、把握し、仕事がしやすく、やりがいがあるような環境づくりに、取り組んでいる。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢や経験にとらわれる事なく、専門職として、高齢者介護に適した人材を採用している。職員の能力を発揮してもらうために、研修や会議に積極的に参加できる機会を設けている等ホームは定年制度はなく、社会参加就業参加に意欲的な人材には、頑張ってもらっている。	認知症を理解し個々に応じた介護ができる人材を職員の紹介で採用し、オンライン研修などで育成に務めている。20代～70代の女性職員が其々の希望のシフトで就労し、現在休職中で来春復帰予定の職員もある。管理者は、職員の介護疲れを労い休憩時間にソファで足を伸ばして寛ぐように提案したり、職員の誕生日にはケーキを贈り、夫々の暮らしを気遣っている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権研修に参加し、行政からのパンフレットも掲示している。勉強会を通じて全員で共有している。	管理者は、「これが自分だったらどうしてほしいか」を念頭に、DVDを活用したり入居者への声かけや対応を事例として、人権に関する内部研修を実施している。	入居者や職員が共に笑顔になるために、カスタマーハラスメント方針の整備で、さらなる人権教育や啓発活動の推進を期待します。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホーム内の勉強会も毎月実施している。職員の悩み等は管理者や同僚で対応している。しかし コロナ禍により個々のストレスも多様化し対応も様々。しかし、働きやすい職場を継続していきたい。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	宮若市は、GHみやわかを立ち上げ、グループホーム間同士の交流や勉強会を支えてきた。コロナが 5類に 移行してから研修会も再開し 今後今まで以上に情報交換が出来ると思います。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者それぞれに、主にお世話する担当スタッフを位置づけ、常に話しやすい環境を整え、信頼関係を作り、相談など気楽に出来るようにしている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスの利用を開始するときは、家族との面談で、要望、不安等お聞きし、信頼関係を築いている。 又、毎月、入居者のご家族の面談の時間をつくっている。(事前に訪問日程の打合せをしている)		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族や本人の要望に重点を置き、必要とされている支援をできるだけスムーズに行えるように、努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居される以前の生活歴を知り、それに合った会話をしている。 昔を 思い出し懐かしむことも 共有する。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	状況の変化や困ったことがあれば、すぐに連絡して、対応している。月に一度は、御家族様との面会を行っている。(5類後)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の希望があれば、友人や馴染みの方との交流の支援を行いたい、最近では外部との交流がコロナ禍の為希薄になっている。	家族や遠方から帰省された家族の面会は当たり前として、廊下入口に設けたアクリルスクリーン越しで、5～10分、2名までの面会をお願いしている。訪問美容の利用を継続し、年賀状や暑中見舞いは職員が代筆するなど、馴染みの人や家族との関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	此処の入居者の方々は、皆仲が良く、孤立している人はいません。しかしながら、高齢で介護度も進むなか、他者とのコミュニケーションがうまくいかず、職員が橋渡しする事が多くなった。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	以前は長期入院で退居となった元入居者様の支援をさせて頂く事もあったが、現在は終末期看取り退居のパターンが多くなりその後の御家族様との交流は少ない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	現在 介護度が進み コミュニケーションが取りづらくなっています。意思の疎通がままならない中で 出来るだけ、思いに叶うケアを 心掛けています。	管理者は家族との初回面談には十分に時間をかけ、入居者の職歴や生活歴、思いや意向の把握に努めている。立ち上がりや移乗時に職員の肩などを強く掴む行為の対応に苦慮しているが、生活歴から納得できることもあったと、管理者は話している。	再アセスメント結果を時系列に印字の色を替えて記載するなどの工夫で、更なる思いや意向の把握を期待します。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から聞き取りを行い、把握につとめている。また 他施設や病院からの転居では 入居前の状況などを 状況提供票などで確認して過去歴の収集に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	基本的な時間の 過ごし方は 決まっているが、現在 車椅子の方々が大半でホールにて 見守りの中 過ごして頂く時間が多い。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	スタッフや関係者と担当者会議を行い、介護計画を作成している。それに沿って定期的にモニタリングをおこない現状に沿ったプランを作成している。またスタッフ会議などで介護計画の把握 ケアの統一をはかる。	職員の気づきやモニタリング結果を話し合い、より現状に即した介護計画の作成に努めている。エアベッドの導入で介護負担の軽減や褥瘡予防に取り組み、昨年寝たきり状態で医療機関から入居された方は、毎日2回の訪問看護(医療保険)と連携しながら、褥瘡治癒や拘縮の防止、尿路感染防止に努めている。	全職員が計画を常に目にしながらケアを実践するために、訪問看護やリハビリとの連携を短期目標やケア内容により具体的に記載されることを期待します。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々、介護日誌・健康チェック表をつけている。各個人のカルテを作成し、検査結果や服薬状況を綴っている。状況の変化があれば、その都度カンファレンスを行い情報を共有し、ケアプランに反映している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	それぞれのニーズに対応して、大切なのは信頼関係を築くことだと思われる。家族や入居者様が何でも相談できる 気楽に話せる環境整備ができる様にしている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	個々が中心に活動できる様、医療・地域・ボランティアの整備を充実させていたがコロナ禍において活動が殆ど出来ていない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームドクターがいて、月に2回往診をお願いしている。他に必要なら外来受診や定期以外の往診も、してもらっている。本人及び家族の希望があれば 眼科・歯科・皮膚科などの受診も付き添っている。	協力医療機関が全入居者のかかりつけ医で、定期や不規則の訪問診療を受けている。電子カルテをかかりつけ医と共用し、状態変化があれば24時間いつでも連絡できる体制を構築し、先入院された方もある。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎月1回以上のスタッフミーティングに看護師を含め、全員参加し、個々の体調を把握し、適切に受診等が出来るように、情報を共有している。申し送りノートを活用しケアが統一できる様にする。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は介護添書を必ず病院へ渡し、ホームでの状況を伝えている。入院中は、ドクターやナースからの状況報告を電話連絡で行う。退院後は、看護要約を参考にしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	御家族との、終末期に向けた、話し合いを密にしている。終末期の対応に関する意向確認書を作成し、同意を得ている。スタッフと情報を共有し支援に取り組んでいる。	全入居者がホームでの看取りを希望され、意向確認書を取り交わしている。要介護5と認定された時点で主治医や家族と話し合いを重ね、意向を確認しながら2名の入居者を看取っている。暮らしを支援した方を看取るのは自然な事として、今後も看取りに関わる予定である。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について、マニュアルを作成し、スタッフに確認してもらっている。日常の変更事項は申し送りノートを活用している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ホーム内に避難経路図を提示している。防災訓練は、入居者及び、スタッフ、で行い、消防署員の指導を得て、年2回実施している。	9月半ば、消防車が来所し、水消火器を使用した訓練を実施している。消防署が訓練のアナウンスした後に、防災サイレンを使用している。先月地域同業者協議会開催でBCP策定研修会が開催され、BCP策定に取り組んでいるが、夫々の家庭の防災に通用すると管理者は話している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権やプライバシーを尊重したケアを実施し、入居者の意向に沿うよう根気強く対応している。意思の疎通が 出来辛くとも 想いを汲み取る対応を心掛けています。	要介護5の方が5名もあり、意志の疎通が困難な入居者にも、〇〇さんと穏やかに呼称し、「車椅子を引きます。ちょっと、動きますよ」と声をかけて介助している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者様の三分の二が 介護5レベルであり、自己決定 意思決定が 困難であるため 思いを 出来るだけ汲み取るよう努めています。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	意思疎通の出来る方は、そのおもいを出来るだけ形にし 困難な方に対しては そのかたの 希望を思い描き対応に心掛ける。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2か月に1回散髪をしに、来てもらっている。ホールで 過ごされる場合は、日常着に必ず着替えて めりはりを付ける。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	現在ミキサー食が大半を占めており、形状を楽しむことが困難である。が 食事の内容を伝えて 食介に工夫を凝らすよう心掛けている	食事は一品ずつミキサーにかけ、時間をずらしたり居室でゆっくりと食事を介助している。管理者は経口摂取の意義やスキルを熟知し、中にはまずスプーンで試み、その後はチップで少量ずつ嚥下を確認しながら介助している入居者もある。殆どの入居者が、職員の声かけや見守り、介助で全量摂取されている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康チェックを毎日記録し、1日の食事量、や水分摂取量のチェックをしている。また、入歯での摂取状態を把握し、きざみやお粥など、各個人に応じた支援をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯磨きや義歯洗浄がおこなえるように 歯ブラシや、洗浄道具を用意し、自力で出来ない人には、介助をしている。入歯は洗浄剤を使用しスタッフにて管理している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄は個々にあった声かけを行い、自力でトイレで行えるよう支援している。 居室内ポータブルトイレは使用せず センサー設置で対応歩行不可の方には車椅子にてトイレ介助を行う。	車椅子を利用される方も、トイレでの排泄を基本にしているが、夜間紙オムツの方は2時間毎に汚染状況を確認している。尿カテーテルを留置している入居者もあり、ルートやハルンバックの尿の性状を確認し、水分摂取を促している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日バイタルチェック時、便通確認をしている。便秘の方は、必要に応じて下剤薬を服用してもらっている。便通を良くするために水分摂取、運動、食事の工夫なども、おこなっている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は午前中で一応順番は決めているが、体調により順番が変わったり、シャワー浴や、清拭に変更することもある。	広めの個浴槽は清掃が行届き、週2回を目途に入浴を支援している。車椅子の入居者はシャワー浴と冬場は足浴で対応しているが、シャワーの出し方や湯温を調整したり、浴槽に入ってもらいたいと職員3人体制で支援するなど、入浴を楽しむことができるように支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜によく休めるようレクリエーションや程よい運動などで、出来るだけ、昼夜逆転しないように、日中は覚醒するよう支援している。出来るだけ居室にこもらなくてよい環境整備に努めている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬は、誤薬を防止する為、名前を明記し朝、昼、夕、眠前と分けて保管し食事ごとに、直接本人に飲ませている。 各入居者のカルテに内服の効能、副作用の文献を綴じ込みいつでも、スタッフが確認出来るようにしている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	最近では入居時には、車いす生活 超高齢者(95歳以上)であるかたも少なくなく全面的な介護を必要とする方も多く入所されるようになった。その人に沿ったたのしみの支援を提供出来るようにしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本来ならば、ひと月に一度の外出やレクリエーションに参加するところだが、現状では、中々困難にてホームにてレクリエーションを行う。(ボランティアの参加も困難)	今春はホーム周囲の桜を車イスを押して見物したり、テーブルを出して園庭で楽しんだりしている。コロナ禍以前は「〇〇に行きたい」は家族の同行で出かけることが多かったので、収束の折には希望の場所に出かけたいと管理者は話している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在現金を個人管理している入居者様はいない。おこずかい帳を各入居者様ごとに用意して 管理している 月末に家族に確認して頂き確認印を頂き預かりの領収書を渡す。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	現在 電話や 手紙等の外部との交流はないが 毎月の面会交流を行っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内は 常に清潔保持し 入居者様の接する箇所は アルコール消毒を 徹底している 危険個所のないよう 安全面に考慮している。	玄関を入ると、下駄箱の上の年代物の福助人形や穏やかな笑顔の管理者や職員が出迎えてくれる。アクリルカーテンをくぐると、清掃が行き届いた廊下の壁や飾り棚には入居者の遺作や家族の贈呈品などが掲示され、在りし日を偲ぶ場となっている。正面奥の居間の対面式厨房から美味しそうな匂いが漂い、居間で車椅子やソファで寛ぐ入居者の姿がある。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	現在、車いす生活の入居者様が多くなり、テーブルにて車いす生活が中心となっている。また、体調に合わせてソファで休まれるなど楽に過ごして頂いている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際に持ち込まれるものには、概ね制限はなく、ご本人の使い慣れた物を持ち込んでいただいている。	どの居室も職員手作りの表札が掲示され、長めの暖簾の隙間から、入居者の動向を垣間見ることができる。ベットやクローゼットが備え付けられ、筆筒などの持ち込みもあるが、車椅子を使用している入居者が多くなり、安全に動けるように整理整頓し、動線を確保している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーは勿論であるが、廊下が一直線で長く、手摺りが、ちょうどリハビリバーの代わりとなり、歩行訓練に役立っている。リハビリカードを作り歩行など達成したら各自丸印を付け意欲が持てるように支援を行う		